



三戸町役場に掲げられた「聖山名久井岳之図」(複製・部分) = 筆者撮影

吉田初三郎が描いた

「聖山」名久井岳

中園 美穂

(弘前大学非常勤講師)

1932(昭和7)年10月、鳥瞰図絵師として著名な吉田初三郎が十和田湖一帯の鳥瞰図を作成するため、三戸町周辺の地勢調査をおこなった。彼が訪れた当該地方は

南朝側の長慶天皇の遺蹟探究や起陵運動が盛んだった。

1926(大正15)年に南朝側の長慶天皇が即位したことを認める詔書が宣布されたことで、全国的に長慶天皇の遺蹟に関する請願運動が活発化していた。こうした動きは、長慶天皇の御陵が定まっていなかった影響が大きいのだろう。

三戸町・留崎村(現三戸町)・向村(現南部町)

など、各町村長と有志たちは、長慶天皇御遺蹟保存会を立ち上げていた。名久井岳の麓には、長慶天皇ゆかりの遺蹟が点在し、留崎村の泉山陵(稜威館ともいう)と、向村の有末光塚の二つの陵墓候補地が存在した。しかし県内では、中津軽郡相馬村紙漉沢(現弘前市)に所在する上皇宮が、すでに御陵参考地として宮内省(現宮内庁)の指定を受けていた。こうした時期と状況から、長慶天皇御遺蹟保存会が初三郎に、鳥瞰図である「聖山名久

井岳之図」を描いてもらうよう依頼したと推測される。同会の会長は、1933(昭和8)年4月から三戸町長をつとめる松尾節三だった。鳥瞰図名に「聖山」を冠するのは、長慶天皇関係の遺蹟がある名久井岳に対する畏敬の念のあらわれだろう。

興味深いのは、初三郎の署名である。従来、彼は皇室ゆかりの地を描いた鳥瞰図に「謹作」や「謹画」と記す傾向がある。当該鳥瞰図が「敬寫」とされたのは珍しい。「聖山名久井岳之図」は、名久井岳の麓に点在する遺蹟や家並みを中心に、中央部には名久井岳と三戸城跡である城山公園が描かれている。公園内には、祭神が南部氏の始祖の南部光行である糠部神社が鎮座する。

1940(昭和15)年に、三戸町では、県内および岩手県に在する旧南部藩士と旧南部藩関係市町村に呼びかけ、「南部公忠誠顕彰塔」と宝物殿を城山公園内に建設する計画を立てた。計画は、皇紀2600年と南部光行の糠部入国750年を記念し、光行を「藩祖」とし、皇室に対する忠誠を示した旧藩士たちが三戸町に住んでいたことを意味していた。初三郎の作品記録によれば、「聖

山名久井岳之図」の制作は1933(昭和8)年である。しかし、この鳥瞰図には1941(昭和16)年完成の設計図に基づいた南部公忠誠顕彰塔が描かれ、新たな建築物が加わっている。

三戸町教育委員会の野田尚志氏によると、同塔は建立されなかったという。制作時と描かれた内容が異なることは、初三郎が仕上げた鳥瞰図に対し、加筆修正をしたことになる。弟子たちと綿密な現地調査に基づいて鳥瞰図を描いてきた彼が、加筆修正に至った背景には何があったのだろうか。彼が皇室を深く崇敬していたことは、名久井岳に「聖山」を冠し、「敬寫」と記したことからも理解できよう。それゆえ彼は、南部光行を藩祖と仰ぎ、皇室に対する忠誠を示す名久井岳山麓の人々の思いに共感し、彼らの強い意志を背景に計画中の顕彰塔を加筆したのではないだろうか。初三郎が描いた鳥瞰図は独特な芸術作品であると同時に、歴史資料としても大いに活用されている。もちろん描かれた対象物についての資料批判は必要だが、初三郎に鳥瞰図の制作を依頼した人々の意志や時代背景を理解することが何よりも大切なことだと思う。